



50

号記念エッセイ

歌舞伎の演技を知るために —浮世絵と地芝居—

藤澤 茜 (非文字資料研究センター 研究員)

これまで、江戸時代の文化を研究する立場として、様々な資料との出会いを重ねてきた。歌舞伎、人形浄瑠璃(文楽)などの演劇、そして浮世絵や小説の挿絵といった絵画資料を扱うことが多く、まさに「非文字資料」と長く付き合ってきたといえる。非文字資料研究センターの研究員となり、様々な班の活動にとっても刺激を受けている。

非文字資料の中で、絵画資料の果たす役割は大きいと考えられる。筆者は、歌舞伎を描いた役者絵を調査し、それぞれの役者や取材した芝居の上演年代の確定、作品リストの作成を行ってきた。まず、描かれる役者を特定するところから始めるのだが、ここで重要な役割を果たすのが「似顔絵」である。江戸中期以降、個性を重視した歌舞伎役者は似顔絵で表現されており、その似顔の判別は役者絵を正確に分析するための不可欠要素となる。特に、出版規制がなされた天保の改革の後など、役者名の記載がない役者絵の場合、似顔絵が大きな情報源となる。役者の顔そのものが、一つの「情報」となったのである。

役者似顔は、歌舞伎研究においても大事な材料となる。役者の顔立ちが確認できれば、色男や悪役など個々の役者が得意とした役柄と容貌の関係も想定できるからである。

悪役を得意とした江戸後期の名優、五代目松本幸四郎は、凄みのある演技をすると子供が怖がって泣き出すこともあったと伝わる。「鼻高幸四郎」と称されたように鼻が高い容貌は役者絵にも表されており、【図1】のようにあえて横顔で描かれる作例も多い。実際に『菅原伝授手習鑑』(車引)の松丸丸、『伽羅先代萩』の仁木弾正のように、幸四郎の演技を継承して現在でも横顔を見せる演出を残す役柄も存在するほどである。

こうした似顔絵の区別はどの絵師も行っており、当時の優れた人物描写が浮世絵の人気を支えていたのだと実感する。

似顔絵以外にも、役者絵から受け取ることができる情報は多岐にわたり、大道具や小道具、衣裳や髪などに加え、演技や演出の一端を知る手掛かりにもなる。脚本が残っていても衣裳などに関する言及はないため、一度上演が途絶えていた作品を復活上演する際に、浮世絵を参



【図1】 初代歌川国貞画「四天王産湯玉川」文政元年(1818)
東京都立中央図書館蔵東京詠料文庫蔵

考にする場合がある。例えば歌舞伎十八番『毛抜』の現行の衣裳は三代歌川豊国の役者絵を参考に設定され、脚本が残っていない舞踊劇『申酉』の場合も、場面設定や演出を補足する材料として浮世絵が利用されている。筆者もこのように、ビデオやDVDのない時代の演技や演出を明らかにするため、浮世絵を活用したアプローチでの歌舞伎研究も行っている。

その研究の中で、動物を演じる際の演出について、興味深い例を確認することができた。

動物が登場する芝居は多々あるのだが、牛や馬など役者が縫いぐるみを着てつとめることが多い一方で、役者自身が動物として演技をする場合もある。人間に化ける能力を持つとされる、狐や猫である。この二つは浮世絵



【図2】 初代歌川国貞画「玉藻前御園公服」文政4年（1821）東京都立中央図書館蔵東京誌料文庫蔵

における描写に共通点があることを、ここで指摘したい。

【図2】と【図3】は、狐と化け猫の演技を表現したものであるが、十二単姿で黒雲に乗り、腹ばいのような姿で飛ぶ姿が共通している。【図2】（玉藻前という美女に化けた狐）のように空を飛ぶと考えられていた狐はともかく、なぜ歌舞伎の化け猫は空を飛ぶのか、筆者はつねづね疑問に思っていた。だが、狐との類似性を浮世絵に見つけてから、『譚海』や『耳囊』といった随筆、江戸時代の小説『朧月猫之草紙』など調査の対象を広げると、二つの動物の深い関係が分かってきた。ともに陰の動物で、年を経て妖力を得ると人に化ける能力を得て尾が分かれること、空を飛ぶことができることなどである。歌舞伎では幕末に化け猫の芝居が流行するのだが、玉藻前などですでにある「空を飛ぶ狐」の演出を化け猫

にも応用していることが想定される。実際に歌舞伎の演技でも、この二つの動物は指を付けて軽く握るなど、手に関する表現の共通点も確認することができる。絵画表現、演技方法など多様な視点から



【部分図】

【図3】 三代歌川豊国（初代歌川国貞）画「東駅いろは日記」文久元年（1861）筆者蔵

狐と猫の関係を明らかにすることができるのは興味深い。

ある事物に対しての「イメージ」は、このように絵画化、ビジュアル化されて伝えられることが多い。非文字資料を用いることで、様々な可能性が広がることを筆者は実感している。

歌舞伎の芸は、「口伝」という形で継承されてきたが、個々の役者による演技の「型」が生み出されると、古い演技の方法が淘汰されてしまうことも多々生じる。その演技の型を知るためには、個々の役に関する工夫や、どの型を継承しているかなどの情報が記載される芸談を確認することが重要である（先述の狐、猫の手の表現に関しても、役者の芸談が残されている）。それにプラスして有効な研究主題として筆者が注目しているのが、日本各地に残る「地芝居（地歌舞伎）」の調査である。岐阜、兵庫、神奈川は日本三大地芝居の地ともいわれ、特に岐阜県では三〇を超える地歌舞伎の団体が活動するなど、現在も地歌舞伎が盛んである。筆者は2023年3月に岐阜県の地歌舞伎の調査と、地歌舞伎の出演者にも聞き取りを行なった。かつて歌舞伎役者が伝えた芸を地元の人が大事に継承していることから、その演技や演出を調査することで、現在の本公演では残されていない演技も知ることが可能になる。今後の研究課題となるが、それぞれの地域に残る芝居を調査することで、多くの発見を得られることが期待される。

非文字資料の調査の対象は、まだまだ広がっていくようである。これまで顧みられていなかった資料の発掘、それらを用いた新たな研究方法の発見を楽しみにしている。